

vol. 59

2011.10.20



Newsletter

本号の記事から

- | | | | |
|---------|-------------------------|----------|----------------------------|
| p. 2 | 2011年度第5回運営委員会議事録 | p. 8 | 日本移民学会奨励賞選考委員会からのお知らせ |
| pp. 3-8 | 2011年度日本移民学会ワークショップ | p. 9 | 新入会員一覧 |
| p. 8 | 日本移民学会 第22回年次大会のお知らせ | p. 9 | 『移民研究年報』第19号特集テーマ原稿募集のお知らせ |
| p. 8 | 第22回年次大会で自由論題報告を希望される方へ | pp. 9-10 | 寄贈図書一覧 |



■ 2011年度 第5回 運営委員会議事録

2011年9月19日 午前10時30～11時30分

【場所】高知県高岡郡佐川町立・桜座

【出席者】吉田亮、坂口満宏、森本豊富、木村健二、村川庸子、河原典史、
物部ひろみ
(事務局) 鷺海量良
(委任状) アンジェロ・イシ、飯野正子、桑井輝子、守屋友江、
島田法子、白水繁彦、菅美弥、高木真理子
(欠席) 竹沢泰子
(文中敬称略)

《報告事項》

1. 各種委員会

(1) 大会企画委員会

森本委員より、第22回年次大会の準備状況について報告があった。

①大会は、2012年6月30日(土)、7月1日(日)の両日、関西学院大学に於いて開催する。

②大会委員は菅委員、南川文里会員、田中きく代会員(開催校代表)。

③シンポジウムのテーマは移民学会20周年記念誌論文集の合評を検討中。また予算が許せば海外からゲストスピーカーを招聘したい。

(2) 編集委員会

菅委員に代わり坂口委員より『移民研究年報』第18号の進捗状況について報告があった。査読を経て書き直しとした原稿の提出を9月末、入稿を10月末としており、例年通りのスケジュールで進んでいる。12月の編集委員会で第19号の特集テーマについて話し合う予定である。

(3) 共同研究推進委員会

木村委員から報告があった。

①河原委員の尽力により今年度のワークショップを高知県高

岡郡佐川町で開催する運びになった。

②共同研究プロジェクト助成については特に報告すべき事項は無い。

(4) 広報・研究交流委員会

白水委員の代わりに坂口委員より報告があった。

①『日本移民学会ニューズレター』第58号は8月10日に発送された。第59号の発行予定は10月20日で、年次大会の告知を行う。第60号は2012年3月31日に発行予定。

②ホームページの刷新企画については、学会長のメッセージをリニューアルする。今年度のワークショップに関連して高知県知事からメッセージが寄せられたので本人の承認を得てから、ホームページに掲載したい。また移民学会独自のドメインを取得することを考慮中である。

(5) 20周年記念論文集編集委員会

竹沢委員の代わりに坂口委員より特に報告事項がないことが伝えられた。

(6) 日本移民学会賞選考委員会

吉田委員から選考に十分な時間が取れるように従来よりも応募締め切りを一ヶ月早め、次年度の奨励賞の締め切りを2011年12月31日に変更することが報告された。

(7) 北米日系新聞の電子化に関する特別委員会

村川委員より報告があった。

①本委員会の主な任務として、特に重要な新聞を10点挙げる事、重要度の基準を示し、それにしたがって順番をつけることとした。

②現時点では、メールを用いて各委員と意見交換を行っている。

2. 事務局

《審議事項》

1. 会員動態 (9月19日現在)

(1) 以下の入会希望者4名について審査し、いずれも正会員として承認した。

[学生] バソヴァ・オリガ、大熊智之、山田亜紀、伊藤雅俊

(2) 退会者無し。

(3) 会員総数は418名(一般:301、学生:94、特別会員:4、休会:1、不明18)。

2. 第22回年次大会案内ならびに自由論題報告希望者募集要項案について

問い合わせ先を事務局に一本化することとし、いずれも原案を承認した。募集要項ならびに大会案内は10月20日発行予定のニューズレターに掲載するとした。

3. 2012年度日本移民学会奨励賞応募要領案ならびに応募用紙の見本について

原案通り承認され、10月20日発行予定のニューズレターに掲載することとした。

4. 『移民研究年報』掲載論文の機関リポジトリ転載許諾の件
名古屋大学附属図書館から『移民研究年報』掲載論文の同大学機関リポジトリへの転載承諾について問い合わせがあった。本件については転載を承認するとした。なお、今後このようなケースが増えると予測されるため、対応方針として『移民研究年報』の発行後一年間は転載を控えてもらうこと、転載に際しては書誌情報を明記してもらうこと、転載承諾書の様式を整えておく必要があることなどが議論された。

5. 和歌山大学シンポジウム後援依頼の件

和歌山大学東悦子氏より出された和歌山大学観光学部主催シンポジウム「和歌山から世界への移民Ⅱ～過去から現在、そして未来への絆を紡ぐ」(2011年10月29日開催予定)に對する本会の名義後援依頼を審議し、承認するとした。

6. その他

①物部委員よりカリフォルニア大学サンタクルーズ校で進められているナガミネ・プロジェクトの概要ならびに同プロジェクトの関係者が日本の研究者との交流を希望している旨報告があった。運営委員会では当該分野に関心のある本会会員を紹介することなどが提案された。

②琉球大学「人の移動と21世紀のグローバル社会」プロジェクト移民研究班より「国際フォーラム『人の移動と21世紀のグローバル社会』—海外日系紙記者のみた移民社会—」案内広告の本会ホームページ掲載依頼があり、承認した。

7. 次回以降の運営委員会／四役会議／各種委員会

第6回運営委員会は2011年12月3日、関西学院大学(第

22回年次大会開催校)にて開催する。

以上

(文責:坂口満宏・物部ひろみ)

■ 2011年度日本移民学会ワークショップ

“高知県から日本の移民を考える”

今回のワークショップは、高知県高岡郡佐川町を会場に、佐川町・水野ブラジル協会との共催のほか、高知県高岡郡佐川町教育委員会と高知新聞社の後援をうけ、2011年9月19・20日の2日間に渡って実施された。

第1日目は、佐川町立・桜座で開催された。第1部の研究会では、中村茂生・中川美佐・飯高伸五の三氏の発表があり、コメンテータの木村健二氏をはじめ、会場との討論が行われた。各氏の発表・コメント要旨は、別項を参照されたい。第二部は、留学・取材でブラジル滞在経験のある高知新聞社・富尾和方氏によるスライドの紹介と、坂口満宏氏との対談であった。富尾氏は、まずカーニバルを見ると移民社会ブラジルの特徴を知ることができるとし、間近で取材した迫力ある写真を多数示しながら、日本イメージが大胆にデフォルメされている様子を紹介してくれた。ついで対談をとおして高知県内に残されている移民関係資料の保存と活用の必要性を説いた。

参加者はおよそ140名、その内訳は移民学会会員14名、ニューズレターなどを見て来会した研究者5名で、残りの120名余りは佐川町の皆さん、高知市などからの参加者であった。地元高校生5名の参加もあった。

また、別掲の通り、本ワークショップの開催に際して尾崎正直高知県知事よりメッセージを頂いた。

第2日目は、ブラジル移民の父・水野龍のゆかりの地を訪ねる見学会が開催された。台風が近づく雨模様のなか、貸切りバスに乗り込み、森田友和さん(ブラジル移民経験者)による解説に耳を傾けながら、顕彰記念碑、生家跡や自由民権運動活動時代に演説した乗台寺、西原清東生家跡などを見学した。

今回のワークショップでは、懇親会にもご参加いただいた佐川町長・榎並谷哲夫氏をはじめ、多くの佐川町の方々にお世話になりました。また、本ワークショップ関係記事が『高知新聞』2011年8月25日、9月21日に掲載されました。あわせて、末尾ながら、深謝申し上げます。

(コーディネータ・河原典史)



榎並谷哲夫佐川町長と会場の皆さん

第2部の発表者
高知新聞社・富尾和方さん土佐市ブラジル移民望郷の碑を解説する
森田友和さん

<尾崎正直知事のメッセージ>

この度は2011年度 日本移民学会ワークショップ「高知県から日本の移民を考える」が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

高知から海外へは、ブラジルをはじめ、パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ドミニカ、ペルー、そしてアメリカに多くの方が移住されておりますが、中でも、移住者を初めて募集して送り出し、後にブラジル移民の父と呼ばれた水野 龍氏は、本日の開催地であります、ここ佐川町のご出身であります。私自身、3年前の2008年にブラジルを訪問した際、初期のブラジル移住において、水野 龍氏 をはじめとする多くの本県出身者が指導的役割を果たされたことを詳しく知り、大変感銘を受けました。高知県にとりまして、日本人のブラジル移住の歴史は後世に語り伝えるべき歴史であり、移住への道を切り開かれた偉大なる先人の精神や功績を若い世代にも伝えていかなければならないと強く感じました。

本日のワークショップ第1部では、水野龍氏の他、ハワイへ渡った 奥村多喜衛氏、ミクロネシアへ渡った 森小弁氏 とモリ・ファミリーといった海を渡った高知県の人々についての研究発表があると伺っております。奥村 多喜衛氏が設立されましたハワイのマキキ聖城基督教会には、皆様もご存じかと思いますが、高知城をモデルにした教会堂があります。そして奥村 多喜衛氏 の日米親善の思いが受け継がれ、現在も高校生同士の交流などが続いております。また、現在のミクロネシア連邦の大統領は、森 小弁氏 の曾孫にあ

たられ、高知をご訪問いただいたこともあります。移住者の皆様はもちろん、そのご子孫がそれぞれの地で、大変なご苦労をされながらも勤勉、実直といった高い評価を得て今日の社会的、経済基盤を築かれ、その国や地域の発展に大きく貢献しておられることは喜びに堪えませんし、私達高知県人にとりまして大きな誇りであります。

今、改めて移住された皆様の足跡を見つめ直すことは、特に若い世代の方々にとりまして、先人の行動から何かを感じ、学んでいただく良い機会になると思います。こうしたワークショップが高知県で開催されることは誠に喜ばしいことであり、今回の機会を設けてくださった関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、本ワークショップの主催者であります日本移民学会、また、共催されております佐川町と水野ブラジル協会をはじめとします関係者の皆様方のご尽力に対しまして深く敬意を表しますとともに、今後ますますのご発展を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

平成 23 年 9 月 19 日

高知県知事 尾崎 正直

発表① ブラジルへ渡った高知県の人びと

—水野龍とその後継者たち—

中村茂生 (早稲田大学移民・エスニック文化研究所招聘研究員)

ブラジル日本移民が1908年に開始されるにあたり、中心となって推進した人物は、佐川町出身の水野龍である。水野にとってブラジルへの日本移民送出は、青年時代から持ち続けた計画・思想の実現という側面があった。本発表では、水野龍の青年時代からの行跡を追いながら、水野にとってのブラジル移民が何であったのかを考える。

水野の基盤にあったのは、佐川の漢学者伊藤蘭林から受け継いだ「尊王」の思想である。思想的には、明治政府で宮内大臣等をつとめ、天皇親政派グループとして活動した同門の田中光顕らと近かったと思われる。

青年時代の水野が自らの課題としたのは、秩禄処分後の士族がどう身を立てるか、新しい日本をどうつくるか、ということであった。水野は、いわゆる民権結社のひとつである佐川南山社の一員として活動しながらこれらに取り組んだ。前者の有力な解決策として、「殖民」という構想を、ほかの民権家同様この時期から持っていた。しかし当初は深くかわりながら、民権運動からは早い時期に離脱する。その後は、反民権運動側ではあるが明治政府に対しても批判的な勢力の周辺で活動する。

初期のブラジル日本移民はコーヒー農園の契約労働力者

であったが、水野の構想の中には、計画段階から「殖民」が含まれていた。移民会社の代表である水野にとってブラジル移民送出は業務であると同時に、過剰人口問題等国家が抱えた課題の解決策として日本人の海外「殖民」を実現するという意味で引き受けた国家事業でもあった。

水野のブラジル移民構想には、自由民権運動のなかで生まれた「殖民」という発想の応用と、水野が理想とする共同体の建設という側面があったことを指摘できる。また、水野の同世代の土佐人で移殖民事業に携わった者として、西原清東、坂本直寛らがいる。彼らに共通するのは、自由民権運動への参加と「挫折」という経験である。自由民権運動と移民送出との関連が考えられる。

ブラジル移民送出事業を引き継いだ竹村與右衛門、ブラジル日本移民社会の中心人物となった下元健吉、中沢源一郎などの高知出身者は、水野の後継者とみることができる。

発表② ハワイへ渡った高知県の人物と—奥村多喜衛の軌跡

中川英佐 (高知大学・非)

高知出身の奥村多喜衛 (1865 - 1951 年) は、1894 年にキリスト教伝道者としてハワイに渡り 1951 年にホノルルのクイーンズ病院で亡くなるまで、生涯をハワイ日本 (系) 人社会に捧げた。彼の活動は伝道から教育、医療、国際交流、親善、平和へと及んだ。19 世紀末のハワイに渡った日本人伝道者は多いが、奥村ほど多領域で半世紀以上も活躍した人物は他に類を見ない。

奥村は武士の家に生まれた。父奥村又十郎は土佐藩士第 11 代目で、後藤象二郎、片岡健吉、岩崎弥太郎などと親交があった。彼らと接した多喜衛少年は国士にあこがれた。

10 代には土佐自由民権運動の影響を受けた。1879 (明治 12) 年に入学した高知中学校では政治家養成教育を受けた。また同校には山本幸彦校長以下、自由民権運動家の教職員が多く自由民権思想も学んだ。教科書にはスペンサーとミルの代議政体論、ラッセルの憲法書、ギゾーの文明史 (以上原書)、ルーソウの民約論 (翻訳) などが用いられた。それらは当時の自由民権運動家たちが学んでいた書物であった。

1884 (明治 17) 年 11 月、奥村は基督教に国民に有益な思想を見出した板垣退助や植木枝盛、片岡健吉 (初代衆議院議長、同志社社長、奥村家の姻戚) らが行った基督教演説会に参加した。以後、高知では片岡ら自由民権運動家が主催する基督教演説会が頻繁に開かれ、翌年片岡健吉や坂本直寛 (坂本龍馬の甥、後の北海道開拓者) を始めとする自由民権運動家が受洗し、高知で最初の基督教会を組織した。しかし奥村はその動きには係わらず、大阪に出た。

1887 (明治 20) 年秋に三大事件建白運動が始まった。片岡健吉を先頭に言論の自由、地租軽減、外交の復活を求める 700 人ほどの壮士が東京に集まった。そのうち約半数が高知県人であった。奥村も大阪から参加し、高輪の後藤象二郎の邸内で坂崎紫瀾 (1883 (明治 16) 年『汗血千里の駒』を『土陽新聞』に連載し坂本龍馬を紹介した) の指南を受け、参画者を鼓舞する板垣や後藤の文書を書き写し配った。決死の覚悟で荒れた日々を送った。そんな折、片岡健吉に勧められ教会に通い始め、不思議と心が落ち着いた。結局運動は失敗に終わるが、帰阪した奥村は半年後に受洗した。そして伝道者になる決意をして 1890 (明治 23) 年に同志社神学校に入った。ハワイ日本人移民伝道に興味を持ったのは在学中のことである。

三大事件建白運動について、奥村は亡くなる数か月前に次のように書いた。

「今考えるとこの運動は今日わが国が採用せんとする民主主義の運動であった。70 年前にすでにかかる政治運動が行われ、その結果僅か 2、3 年以内に憲法発布となり、国会開設となったのである。私どもは何もそんな深い考えで提灯持ちをしたのではなかったが、この事件に出会ったことがわが人生の回転期となったのである」(『楽園おち葉』第三十一籠 (1950 年))

このようにして、奥村は自由民権運動で行動力と気骨を培い、それらはやがてハワイ日本人移民社会で開花した。ハワイ到着直後から「混沌とした移民社会だからこそ教会から外に出て働く」と考えた奥村は、19 世紀末の学校や病院設立に始まり、ホノルル・ダウンタウンの日本人暗黒街撲滅運動、排日予防啓発運動、二重国籍離脱運動、「日系市民会議」など多くの社会事業を展開した。

もちろん奥村の能力が教会や宣教で際立ったのは言うまでもない。1902 年にハワイ日本人基督教会を辞した奥村は、1904 年にマキキ教会を組織した。教会内には教会員以外にも参加できる相互扶助組織「愛友会」を組織し、社会人のための寮、夜学校、英語学校、出版部、職業斡旋部、レクリエーション部、幼稚園などを運営した。奥村は血縁の少ない移民社会では、教会は信仰の場であると同時に大きな家庭であると捉えた。そして 10 年足らずでマキキ教会をハワイ最大の日系教会に成長させた。

ところで、奥村は 1896 年、1906 年、1912 年、1917 年、1920 年、1925 年、1933 年と 7 回の帰国をしている。1906 年には結核に罹った三男尚樹を明石の湊病院に入院させるために帰国したのだが、その際高知にも帰省し、高知県民にハワイの日本人社会を紹介している。そして「予は天下

の諸君、殊に土佐の諸君に向かってハワイ渡航を勧誘する」と呼びかけた（『土陽新聞』10月30日、11月1、2日）。しかし奥村の呼びかけに応えた高知県人は多くはなかったようだ。1982年に山本覚（土佐市出身、1887（明治20）年生）は講師新聞のインタビューに答えて「奥村先生が子どもさんの病気で明石へ来られた時、土佐にも寄られ『ホノルルに行ってみないか』と誘われました」（『ハワイの土佐人』『高知新聞』1982年2月19日）と語った。山本は1906年にハワイに渡り、1907年以降マキキ教会員として奥村を支えた。『マキキ教会会員名簿』（1918（大正7）年調査）には山本のほかに4、5人の高知県人の名前が掲載されている。

そもそも奥村がハワイ移民を呼びかけた頃、高知県の移民熱は低かった。それは水野龍による第一回ブラジル移民事業（1908年）の参加者781人中高知県出身が18人であったことから窺える。

さらにハワイ官約移民が始まった1885年頃の高知に遡ると、生活苦打開策として18世紀半ばに考案された二期作が試作され始めており、農業労働力の県外流出も見られなかった。加えて広島や山口、熊本のように、県令が海外出稼ぎを奨励したわけでもなく、その後、錦衣帰郷した人が新たな移民を呼ぶ移民の連鎖とも無縁だった。

奥村が高知の人々にハワイ移民を奨励した記録は1906年に残っているだけだ。奥村の時代ハワイには高知県人は少なく、県人会もなかった（『ハワイの土佐人』1982年2月12日）。しかしそれが奥村に幸いしたようだ。「奥村先生が積極果敢に活動を行うことができたのも、県人会のしがらみがなかったからだ」とはハワイ島日本人移民資料館（2001年閉鎖）の館長大久保清（1905－2011年）の談である（1996年大久保清館長へのインタビュー）。

発表③ ミクロネシア（旧南洋群島）へ渡った高知県の人びと — チューク諸島のモリ・ファミリー —

飯高伸五（高知県立大学）

1914年から約30年間にわたり日本は当時南洋群島と呼ばれた赤道以北のミクロネシアを統治していた。同地域には、占領当初は海軍による軍政が敷かれ、南洋庁が設置された1922年以降は、国際連盟の委任統治領としての施政が敷かれた。日本統治下の南洋群島には、多数の日本人が移住し、製糖業、鉱山採掘、漁業、農地開拓などが行われ、サイパンのガラパン、パラオのコロール、ポナペのコロニアなど日本人移住者の都市が形成された。1935年の時点で5万人余りの現地人人口を凌駕するに至った日本人移住者数を各支庁管内別にみると、サイパン支庁管内3万9728人、ヤッ

プ支庁管内633人、パラオ支庁管内6553人、トラック支庁管内1980人、ポナペ支庁管内2486人、ヤルート支庁管内481人であった。本籍別にみると、マリアナ諸島で製糖業、パラオやトラック近海で漁業などに従事していた沖縄県出身者が突出しており2万8972人、そのほか上位は東京が4053人、福島が3160人、鹿児島が2374人、山形が1871人であった。

この時点で高知県は157人（男性：98人、女性：59人）と南洋群島全体でみれば僅かな移住者を送り出したに過ぎなかった。しかし、日本と南洋群島との関係史のなかで重要な役割を果たした人物のなかには、高知県出身あるいは高知県ゆかりの人物の存在も認められる。日本統治が始まる以前、1884年にマーシャル諸島に派遣されたとされる後藤猛太郎、1890年代からトラック（現チューク）諸島でコブラの仲買などに従事した森小弁、南洋庁設立後にパラオとサタウル島で民族調査や創作活動を行った土方久功らである。なかでも、青年期の自由民権運動への関わりを経て、トラック諸島に渡った森小弁は、貿易業を軌道に乗せ、現地の伝統的首長の娘と結婚し、現地事情に精通した在留邦人として統治者からも一目置かれていた。1930年代には、森小弁の評伝や紹介文も多く出版され、南洋移住の先駆者、現地で「酋長」になった人物として描かれるようになった。こうした森小弁像は、日本人の移住を促す題材として利用されたと考えられる。

戦後になると、森小弁は流行歌『酋長の娘』、漫画『冒険ダン吉』のモチーフといわれるようになった。また、森小弁の子孫が戦後の現地社会で一大勢力を形成し、現職のミクロネシア連邦大統領を輩出するに至ったことから、モリ・ファミリーは「日系人」有力者としても注目されている。高知県内では、高知新聞社による伝記『夢は赤道に』の出版（1998年）、自由民権記念館の展示『海外に新天地を求めて』の実施（2010年）などにみられるように、とくに注目度は高い。同時に、森小弁とその子孫に関する戦後の表象は、依然として日本社会の側からの視点に終始する傾向があり、母系的な現地社会の構造、日本統治からアメリカ統治への転換期の社会変動など、現地社会の情勢に関する適切な理解に基づいたものではない。ここには戦前の南洋観と戦後の南洋観の連続性を見て取れる。

コメント

木村健二（下関市立大学）

三人の報告者はいずれも重厚なテーマを短い時間で要領よくまとめて報告された。そのなかで、今回取り上げられ

た高知県出身の三人の人物（ブラジルへの水野龍、ハワイへの奥村多喜衛、南洋群島への森小弁）が、共通して自由民権運動の経験を経て移民関係事業に携わったという点がいへん興味深かった。その点は間宮国夫氏の高知県移民史に関する一連の研究業績からもうかがえるところであるが、水野は熊本旅行の経験、奥村はキリスト教、そして森は政治的挫折と日清戦前の南洋観といった媒介項の存在を指摘された点は研究の大きな進展といえよう。

次に移民の定義にもかかわるところであるが（ここでは議論は省く）、『朝鮮満洲南支四国人発展史』（1924年）という資料をもとに、そこに掲載された人びとの出身地別・行先別・職業別人数をみると、高知県出身者は、四国四県でもっとも少ないなかで、朝鮮への官吏や朝鮮・中国への支店出張員（鈴木商店支店員で金子直吉との関係か）などが多かった。東洋拓殖会社による朝鮮への農業移民も全国一であったことを考え合わせると、いったい高知県移民は多かったといえるのか、少なかったのかいずれであろうか。

なお、今回取り上げられた三人の人物は、移民の推進、在留移民の地位保全などの事業に携わった人物であったが、それでは出身地の高知県との関わりはどうであったのか知りたいところであった。産業革命期以降の高知県経済をいかにみていたのかなど、興味深い論点が多々浮かび上がってきたように思う。

2011年度日本移民学会ワークショップ 「高知県から日本の移民を考える」参加記 －ブラジル関係を中心として－

半澤典子（栃木県）

2年間のブラジル生活を終え7月に帰国したばかりであったので、水野龍について興味があったことと世界各地に移民を輩出している高知県の風土と人間について少しでも理解したいと思い参加した。

1日目は、佐川町立桜座での研究発表会であった。研究会に先立ち移民学会が四国地方で開催されるのは初めてとの学会会長の挨拶や佐川町長はじめ教育委員会、水野ブラジル協会、高知新聞等の絶大な協力により、今回のワークショップが開催されることになった経緯を知り、町ぐるみの歓迎に感動した。さらに研究発表中、地元の高校生たちが熱心に聞き入っていた光景には、町の歴史を後世にまで継承しようとする地元関係者たちの意欲を垣間見たようで爽やかな感動を覚えた。

第1部「海を渡った高知県の人々」では、自由民権運動を共通項においたブラジル、ハワイ、ミクロネシアへ渡った人物についての発表があった。

ブラジルに渡った「水野龍とその後継者たち」については、元士族の水野が自由民権運動に没頭する中で「殖民」事業への糸口を見つけ、1908年に笠戸丸移民を創出するまでの思想的背景を土佐の風土から説明されていたのは理解を容易にさせた。しかし、水野とサンパウロ州農務局とのコーヒー宣伝契約により獲得したコーヒーを、水野は自らの事業として組み入れ自ら社長としてカフェ・パウリスタを日本国内に開設していった経緯については、事業家としての一面をプラスに捉えていただけて説明はやや不明だったように思える。「その後継者たち」についても、水野の旅順丸以降の日本とブラジルでの行動を知る手掛かりとなるものであっただけに、解説が時間切れとなってしまったことは残念であった。地元出身の研究者による発表であったので、聴衆も親近感を覚えつつ発表に聞き入っていたように思えた。地元開催の効果は十分に上がったと思う。

次にはミクロネシアに渡った人々としてチューク島のモリ・ファミリーについての発表に興味をもった。戦前の移民とはいえ、日本統治下のミクロネシアに高知県出身者が政治的・経済的実力者として存在し、しかもその子孫は現在ミクロネシア連邦大統領として政治的手腕を発揮しているということは、高知県の誇るべき移住者ファミリーと言えよう。新たな発見をしたような喜びを感じた発表であった。

第2部「ジャーナリストが見たブラジル移民」では、高知県出身者について写真を介して様々なエピソードを交えの紹介だったので理解しやすかったし発表者のエネルギーな行動に感動した。大会終了後に発表者の書かれた著書「南へ」を高知新聞より送っていただき完読したほどだ。

全体として、自由民権運動とのかかわりでブラジル、ハワイ、ミクロネシアへ渡った人物像に触れた点はユニークであったと思うし、黒潮の海に南面した地理的要因が前進指向の高知県民性を醸成したことについては理解できた。しかし、幕末・明治初期と政治思想が華やかに展開されていた地域にしては、世界に羽ばたいた移住者数が少ないことについての一步掘り下げた展開が薄かったように思った。政治的・経済的・社会的要因について調べ上げることは物理的にも時間的にも困難を要すると思うが今後の深化に期待したい。

2日目は、「水野龍ゆかりの地を訪ねる」見学会であった。水野龍顕彰記念碑前では、地元の方々が早朝から公園周辺を清掃しておられ感謝の一念だった。水野史観については現在でも諸説がある。昨年（2010年）6月18日の「ブラジル日本移民の日（移住の日）」にサンパウロで行われた「開拓先亡者慰霊祭」に水野龍の子孫が参会され、サンパウロ総領事たちと感激の対面を果たした記事が現地の新聞に報道されていた

ことからして、水野史観に何らかの変化が見られるようになった表れではないかと思う。乗台寺には水野龍の孫にあたる人たちが書き残して行ったポルトガル語の絵馬が奉納されていた。町立青山文庫でも学芸員の懇切丁寧な説明があり、風土に根付いた文化の深さと素晴らしさを実感した。土佐市波介川（はげかわ）流域のコチア移民の故郷波介村を通過し、西原清東先生生誕地を巡る頃は風雨も激しくなっていたが、森田先生のご案内のもとほぼ予定通りに見学会を済ますことができ安堵した。

■ 日本移民学会 第22回年次大会のお知らせ

日本移民学会第22回年次大会を下記の要領で開催いたします。2012年5月上旬に大会への「出欠票」ならびに詳細なプログラムをお届けします。奮ってご参加ください。

【開催日時】

2012年6月30日（土）、7月1日（日）

【会場】

関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス
（兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号）

【問合せ先】

〔事務局〕 坂口 満宏
（電話/FAX）075-531-9102
（E-mail）imingakkai@gmail.com

■ 第22回年次大会で自由論題報告を希望される方へ

第22回年次大会で自由論題報告を希望される方は、下記の要領を明記のうえ、日本移民学会事務局までお申込みください。大会企画委員会にて要旨内容を検討し、結果をお伝えします。お申し込みは、原則として電子メールにて事務局宛にお願いします。

【要領】

- (1) 報告者氏名
- (2) 所属、連絡先、電子メールアドレス
- (3) 報告タイトル
- (4) 1200字以内の報告要旨

【申込み締切り】

2011年11月30日

【申込み先】

日本移民学会事務局
（E-mail）imingakkai@gmail.com

■ 日本移民学会奨励賞選考委員会からのお知らせ

2012年度日本移民学会奨励賞応募要領ならびに応募用紙

日本移民学会奨励賞は、大学院院生・研究生及び大学院修士課程修了・博士課程満期終了後5年以内の会員による独創的な研究論文を、日本移民学会として評価し、今後のさらなる研究の奨励を目的として設置されたものです。

選考の対象となる研究論文ならびに主な選考基準は、下記の通りです。ふるってご応募ください。

1. 選考の対象となる研究論文

次の条件を全て満たすものを選考対象とします。

- (1) 「新人賞」という観点から大学院院生・研究生及び大学院博士課程満期終了後5年以内の会員によって書かれた単著研究論文（日本語）であること。
- (2) 受賞決定の前年（1月1日から12月31日）に本会の機関紙である『移民研究年報』または大学紀要（大学紀要に準じる研究誌を含む。但し他学会誌は除く）に掲載されたものであること。ただし修士論文、博士論文は除く。
- (3) 自薦あるいは他薦（学会員に限る）により出版年の翌年1月10日までに推薦されたものであること。

2. 選考の基準

受賞審査においては次の項目に照らして総合的に最も高く評価できるものを選考します。

- (1) テーマや手法等が独創的であること。
- (2) 史・資料や研究対象を綿密に調査、把握、分析していること。
- (3) 全体として論理構成が明瞭であること。
- (4) 文章表現が適切で明解であること。
- (5) そのテーマに関する先行研究を把握できていること。

3. 応募要領

本委員会はその任務を遂行するために次のことを行う。

- (1) 応募書類の提出先は、日本移民学会事務局です。
- (2) 応募に際しては、所定の応募用紙に以下の必要事項を明記し、推薦論文の抜き刷りないしコピーを5部、事務局に提出してください。応募用紙は、本会のホームページよりダウンロードできます。

- ① 自薦・他薦の別
- ② 応募者氏名
- ③ 所属
- ④ E-mail

- ⑤推薦論文著者名
- ⑥論文タイトル・サブタイトル
- ⑦収録誌名／書名／巻・号／ページ／発行所／発行年月日
- ⑧論文要旨（400字程度）
- ⑨他薦の場合は、400字程度で推薦理由を記してください

4. 選考結果の公表と表彰

- (1) 選考結果は、授賞式を経た後、本委員会の名において会報およびホームページにおいて公表します。
- (2) 受賞者は、学会長の名において年次大会で表彰されます。

※ 2012年度日本移民学会奨励賞応募締切り
2011年12月31日

【応募書類の送付先】

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町 35
京都女子大学文学部史学科 坂口研究室気付 日本移民学会事務局 奨励賞係

■ 新入会員一覧

★伊藤 雅俊（いとう まさとし）

日本大学大学院国際関係研究科
文化人類学
スマトラ北部、日系インドネシア人、エスニシティ形成・継承・変容、労働移動

★大熊 智之（おおくま ともゆき）

北海道大学大学院文学研究科、日本学術振興会
日本近代史、移民史、植民地研究
近代日本における拓殖教育の展開、移殖民者の内地経験、拓殖関係学校、「植民者」像

★バソヴァ・オリガ

一橋大学大学院言語社会研究科 博士課程
社会と言語
日本におけるロシア出身移民の第Ⅲ派・ロシア出身移民の子供の母語教育・子供の背景

★山田 亜紀（やまだ あき）

University of California, Los Angeles

社会学、移民政策

日本人新一世のアイデンティティ研究、アメリカ生まれの新二世の教育ストラテジーの研究

■ 『移民研究年報』第19号特集テーマ原稿募集のお知らせ

『移民研究年報』第19号では特集テーマを「移民とジェンダー」といたしました。昨今では日本を舞台にした国際結婚、看護師受け入れ、高度技術を持つ「頭脳流出」等、幅広い「人の移動」の場面で女性が主体である事例が多く、ジェンダーから移民を眺めることはきわめて現代的な課題かと思われまます。また、研究史を眺めれば、これまでに「写真花嫁」や「戦争花嫁」についての研究が進められていますが、さらなる歴史の空白を埋める研究も期待されるところです。加えて、従来とは異なる新しい切り口でのジェンダー論等も掘り起こしていきたいと考えています。そこで、次号では「移民とジェンダー」に関連する、幅広い研究分野からの論考を募集いたします。

投稿される方は

- ①氏名
- ②所属・肩書き
- ③連絡先（住所、電話番号、email アドレス）
- ④論文のタイトルを明記の上、800字～1200字程度の要旨を明記のうえ、編集委員会アドレス（editorsjams2011@gmail.com）まで送ってください。

締め切りは、2012年1月31日です。
追って執筆要領や投稿スケジュールについてご連絡します。

菅美弥（『移民研究年報』編集委員会）

■ 寄贈図書一覧

- 山田陽子『中国人就学生と中国帰国子女—中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』風媒社、2010年6月
- 米勢治子・ハヤシザキカズヒコ・松岡真理恵編『公開講座 多文化共生論』ひつじ書房、2011年2月
- 山下清海編『現代のエスニック社会を探る—理論からフィールドへ』学文社、2011年3月

- 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす—』ミネルヴァ書房、2011年4月
- 神繁司『移民ビブリオグラフィ—書誌でみる北米移民研究—』クロスカルチャー出版、2011年6月
- 黒川勝利『両大戦間のアメリカ西北部日系社会—シアトルとその周辺地域における労働、生活、市民運動—』大学教育出版、2011年7月
- 三田千代子編著『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし—』上智大学出版、2011年10月

■日本移民学会事務局からのお知らせ

●年会費納入のお願い

2011年度分までの年会費を下記郵便振替口座へお振込ください。

通信欄には

- ①会費の該当年度
- ②会員区分（一般または学生）
- ③会員名

をご記入の上、お振込みください。

日本移民学会 郵便振替口座：00960-5-95922

一般会員：8,000円

学生会員：4,000円

●所属先や住所、メールアドレスに変更のある方は、ホームページ上の変更届をご利用のうえ、事務局までご連絡ください。

〒605-8501 京都府京都市東山区今熊野北日吉町35

京都女子大学文学部史学科 坂口満宏研究室気付

日本移民学会事務局

[電話/FAX] 075-531-9102

[電子メール] imingakkai@gmail.com



日本移民学会ニュースレター 第59号

2011年10月20日

[発行] 吉田亮・森本豊富・坂口満宏
日本移民学会事務局 京都女子大学 坂口満宏研究室

[編集] 白水繁彦

[デザイン] 剣持龍一、金ミンコン

日本移民学会ホームページ

<http://www.gssm.musashi.ac.jp/research/imin/>